
ヒルクライマー “ 黒羽 ” Hill Climber?Crow?

なめちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒルクライマー “黒羽” Hill Climber? C
row?

【Nコード】

N7777V

【作者名】

なめちゃん

【あらすじ】

「オレは一人で走る。仲間なんて要らない」

ロードバイクでひとり山道を駆る少年、黒羽。

中学三年の夏休み、黒羽は行き倒れの美少女・瀬奈に「匿つて」と頼まれる。瀬奈もまた、ロードバイクに乗っていた。

瀬奈と共に走り、触れ合う中で心を開いていく黒羽。

しかし、別れの際は確実に訪れて……

坂が嫌いなクライマーと、世間知らずな天然少女。

自転車が繋ぐ、恋の物語。

1 眠れる峠の美少女

「Date」7/29 5:20

「From」遠矢先輩

「Sub」ちゃんと練習してるかい？

「Temp」

「Main」

今日は六時集合。

夏休みに入ってまだ一回も来てないけど（驚）今日こそちゃんと来いよ！

来なかったら、今度の朝練は家まで迎えに行ってやるからな！
まだ中学生だからって甘やかしてあげないよん

期待してるよ次期エース！！

「つぎ」

ひらがな二文字で切り捨てると、岬黒羽みさぐくれはは十数分前に届いたばかりのメールを躊躇ためらふなく削除した。手慣れたもので、背中のポケットにしまいながらブラインドタッチだ。

メールの送り主・神島遠矢かみしまとおやは黒羽が通う中学校の卒業生で、現在は高校の自転車競技部に所属する高校一年生だ。もともと自転車部なんてなかったが、クラスメイトに誘われて設立を手伝ったらしい。
これがこの春の出来事。

その後、遠矢は初心者ながらに県大会で上位に入賞し、東海大会

に出場した。さすがにインターハイには届かなかったが、十月・十一月ごろに行われる新人戦に向けて絶賛練習中だ。

しかし練習に力を入れようにも部員が少ない。遠矢を合わせて部員は二人きり。しかももう一人は女子だ。そのため、自分の後輩でたまたまロードバイクに乗っている黒羽に目を付けた。六月末に出会ってから、遠矢は頻繁に黒羽を誘うのだった。

「別にオレは、高校でチャリやるつもりないし」

ただの趣味だ　ぼそりと呟くと、黒羽は玄関のドアを開け放った。夏とはいえこの時間帯はまだ過ごしやすい。適当に乗って遊ぶのには最適だった。ここには口うるさい家族もないし、帰ってきてもからゆつくり風呂に入って、ダラダラ過ごせばいい。

玄関の壁に立てかけてあった自転車を牽^ひいて外に出し、玄関前の小さな階段にペダルをひっかけて立てる。ママチャリのようなスタンドはない。籠^{かご}もない。黒と白を基調とした、シンプルながらもクールな外観のロードバイク。

半指のグローブを両手に着け、自転車用のサングラスをかける。階段に腰掛けてのんびり支度しながら、今日はどこへ行こうかと考える。このアトリエは山の中腹に建っており、ルートの選択は最初に登りか下りかに分かれる。　帰りに登るのは面倒だから、最初は登ることにした。

「……だりい」

登りは好きじゃない。疲れるから。

好き好んで坂道を登ろうとするクライマーの気がしれない。あいつらは全員Mなのだろう　黒羽は勝手にそう思っている。

ヘルメットをかぶり、アトリ工前の道路に出た。普段から滅多に車の通らない田舎の山道は、この時間帯ではより一層静まり返っていた。昼間では公害レベルのセミの合唱すら聞こえない

「ん」

そんな静寂の中に、耳慣れた音が聞こえた。

(……気のせいかな?)

坂の下の方から聞こえた気がして振り向くが、視線の十メートルほど先はコーナーになっていて誰の姿も見えない。遠矢のしつこいメールのせいで意識し過ぎているのだろう　そう結論付けてサドルに跨ろうとして、今度こそ、確実に聞こえた　ギシリ……

……ギ……ギ……キシ……

誰かが自転車で坂を登ってきている。

(遠矢さん？　まさか、逃げ出すのを読まれてた……?)

遠矢だったら全力で逃げてやろう。向こうにとってもいい練習になるだろうし、問題ないはず。

黒羽は余裕の笑みを浮かべて目を閉じ、チェーンとギアが噛み合い、軋む音を聞く。確実に近づいてくる相手を待ちながら、「こいつになら圧勝できる」と確信した。さらにその確信から芽づる式に、

おや？　と思う。なぜ「圧勝できる」なんて思ったのか。

……ギシッ……ギシ、ギシリ……

遠矢よりも自分の方が速い自信はある。だが、最近たくさん乗りこんでいる遠矢を簡単に負かすことはできないだろう。　練習を始めたばかりの疲れていない遠矢だったら、こんなにペダリングが遅いはずがない。遠矢はこんなに遅くない。

（じゃあ誰だっ？）

横並びになるまで我慢できず、ついに黒羽は振り返った。そのサングラス越しの視線の先　コーナーの出口とアトリエ正面の中間辺りに、ふらふらと今にも停止しそうな速度で登るロードバイクがいた。その乗り手の正体に黒羽は目を丸くする。

（女！？）

しかも、黒羽と同じ年頃の少女　。

少女は背中に大きなリュックを背負っていて、歩くのと同じくらいの速度で進んでいた。深くうつむき、色素の薄いロングヘアで顔が隠れている。だが、相当疲労しているのは簡単に見てとれる。今すぐに力尽き落車してもおかしくはないほどだ。

「ハンガーノックか……ッ」

舌打ちして、黒羽は自分のロードバイクを放り出すと少女のもとへ駆け寄った。ビンディングシューズを履いているので走りづらいもどかしい思いで横に並んで、「おい」と声をかける。少女は振り

向かなかった。

「おい！ おいあんた、大丈夫か！？ 聞こえてないの？」

「……………っ」

なんとか気付かせようと声をかけ続けていると、やがて少女が小さく呻^{うめ}いて左へ傾いだ。ちょうど黒羽に寄りかかるようにして、推力を失った少女はふらりと倒れる。華奢な身体を抱きとめて、黒羽はその軽さと頼りなさに驚いた。彼女のジャージに触れた両手の指先が、日陰になっている山道で冷え切った汗を感じる。

「大丈夫？ 立てないなら肩貸して」黒羽は今にも意識を失くしてしまいそうな少女に声をかけつつケータイを取りだした。「とりあえず、救急車」

こんなところまで来てくれるかわからないが、まずは助けを求めよう。しかし、焦る指先をなだめながらケータイを開く黒羽の手を、少女自身が制止してしまった。ケータイを持つ手を力なく握って、首をふるふると横へ動かす。

「……………呼ばないで……………」

「なんでッ」

「……………おおごと、にしちゃ……………ダメだから」

水もろくに飲んでいないのか、かすれた声で訴えかけてくる。少女はアイウェアを着けていなかったたので、その大きな瞳が直接黒羽を見つめる。黒羽は思わず、生唾を飲み込んだ。

「お願い……」

少女の乾いた唇がかすかに動き、鳴き始めたセミの声に消え入り
そんな声で願った。

「私を……かくまって……」

(……………は?)

^{かくま}
匿う?

「? ……ちよつ、おい!」

言い終わると少女の痩身から力が抜けたのがわかった。呆気にと
られる黒羽に寄りかかり、彼の胸に頭を預けて目を閉じる。端正な
横顔が至近距離で目に入り、黒羽は息をのんだ。一度呼吸を正常な
範囲に戻してから状況を整理し、それなのに解が見つからず茫然と
呟く。

「どうしろって言っただよ……?」

夏休みの早朝、人気のない山の中。

「かくまって」と頼むなり眠りについた美少女を抱きかかえたまま、
黒羽は途方に暮れた。

1 眠れる峠の美少女（後書き）

小説なるものを書くにあたり、題材は大好きな「自転車」にしました。

自転車って素晴らしいです。

何があっても前に進むしかありませんから。

2 柚木崎瀬奈（前書き）

柚木崎は「ゆきさき」と読みます。
ルビはふりましたが、念のため……

2 柚木崎瀬奈

やわらかな木の風合いを活かしたりリビングの真ん中。日頃ひとりで使うには大きすぎるサイズのテーブルに、今は所狭しと料理が並んでいた。ハムとチーズのホットサンド、半熟の目玉焼き、スクランブルエッグ、シーザーサラダ、コーンポタージュ、余りものを具にしたおにぎり、カップに入ったままの納豆、冷ややっこ、etc .

それらをすべてひとりで用意したのは黒羽だ。普段は手を抜いている料理に力尽きた黒羽は椅子にぐったりと腰掛け、対面の席で食事に没頭している美少女を気だるげに見やった。しばらくして視線に気づいた少女は、コーンポタージュのカップから顔を上げる。

「どうしたの？」

「いや……あんだ、どんだけ腹減ってたんだよ……」

「たはは……。途中で補給がなくなっちゃってさ。途中から半分意識飛んでたくらいなの」

恥ずかしそうに笑いながらホットサンドにかじりつく少女。彼女は倒れてからつい先ほどまで眠りこけていた。本当に救急車を呼ばなくて良かったのか心配だった黒羽は、枕元ですっとおろおろ戸惑っていた。昼前になってようやく目を覚ました少女は、ほっとする黒羽をよそに、盛大に空腹の音を鳴らしたのだった。

「あんだ、どこから来たの？」

自分もホットサンドに手を伸ばしつつ、黒羽は訊ねた。その言葉に少女はピクリと反応する。

「『あんた』じゃなくて、ちゃんと名前と呼んでほしいかも」

「そもそも名前を知らないんだけど？」

「えっ」少女は今更気付いたかのように声を上げた。「……そうだったっけ？ ごめん、私ご飯に夢中だったから……」

もじもじと身を縮めながらポタージュをすする。猫のような印象を与える大きな瞳が、上目づかいに黒羽を捉えた。カップを可憐な唇から離し、ほっつと一息ついてから名乗る。

「柚木崎瀬奈なせなつています。中学三年生。 お礼もまだ言ってなかったね。助けてくれてありがとう。ご飯でもらって、なんてお礼を言えればいいか……」

瀬奈はようやく食器を手放し頭を下げた。その丁寧な所作に見惚れてしまい、黒羽は自分も名乗るのを忘れてしまう。

キメの細かい肌、手入れの行き届いたロングヘア、おおよそスポーツなどできなさそうな華奢な身体だが、中学生にしてはプロポーションがいい。顔立ちは整っていてお嬢様のな雰囲気があるが、ぱつちりとした大きな両目が快活そうな性格を表している。

「きみの名前は？」

「……岬、黒羽。オレも中三」

「クレハ？」

「黒い羽でクレハ」

「ふむん……………かつこいい名前だね」

「オレは気に入ってないけど」

黒い羽根　そこから連想されるのはカラス。あまりいい印象のある生き物ではない。周りは「かつこいい」などと褒めてくれるが、なんだか冷やかされてる気がしてならなかった。

若干むすつとする黒羽だが、一方瀬奈は別のところに気を取られ、首を傾げていた。

「ねえ、さつきから『オレ』って言うてるけど……………黒羽？さん？は女の子だよね…………？」

「……………は？」

いきなり何を言い出すのだ、この腹ペコ娘は

ピキツと表情を凍らせた黒羽にいぶかしげな視線を向けて、瀬奈は確認のために訊いてくる。

「女の子……………だよね？」

二人は冷房の設定温度が五度くらい下がったかのように錯覚した。

黒羽がぶるぶると小刻みに震えていることに気がついて、瀬奈はようやく逆鱗に触れたことを察する。手遅れだが。

パンツとテーブルをたたいて立ち上がり、首から上を真っ赤にした黒羽は叫んだ。

「オ……オレは女じゃないッ！勘違いすんじゃないっねえ……！」

……

瀬奈が勘違いするのも無理はなかった。

黒羽は身長こそ男子の平均くらいだが、身体は細くてなで肩。顔立ちは女の子そのもので、むしろ本当の女子よりも可愛い。クォーターであり、緑がかった瞳をしている。肩の辺りまで伸ばした柔らかな黒髪が、女性的な外見によく似合っていた。

昔は「ボク」と言っていたし、もっと穏やかな言葉遣いをしていたのだが、あまりにも女に間違えられるため言葉遣いから変えたのだ。「オレ」なんて言う少女は創作の中くらいしかないし、これで大丈夫だろうと思っていた。

なのに。

この、行き倒れの腹ペコ娘は。

「い、ごめんね？　なんか私、地雷踏んじゃった？　黒羽くん……」

「……………」

瀬奈を無視して、空いた食器を黙々と洗っていく。残りを平らげた瀬奈は重ねた皿を運んでくると、「私がやるよ」と半ば強引に黒羽と交代した。黒羽は無言でキッチンを離れ、ソファにどさりと倒れこんだ。瀬奈の方を見向きもしない。

「黒羽くん……………」

(…………うるさい)

クッションを抱きかかえて丸くなると、黒羽は目を閉じ歯を食いしばった。外見になんのコンプレックスもない美少女　しかも知り合ったばかり　に、「女みたい」と馬鹿にされ続けてきた自分の気持ちがわかるのか　と。

惨めな自分が情けなくて泣けてくる。でも、泣いたら女みたいだから泣けない。だいたい、瀬奈とは初対面なのだ。知ってて傷つけるために言ったわけではないのだから、瀬奈に怒りを覚えるのは間違いない気もする。

どうすればいいのか、よくわからない…………

(だから、他人と関わるのは嫌なんだ…………)

……

いつのまにか寝ていたらしい。黒羽が目を覚ました時、壁の時計

は四時手前を指していた。

子供とはいえ、会ったばかりの他人を室内に放置して眠るなど不用心だ。瀬奈は悪さをするようなやつには思えないが、無視し続けて雰囲気が悪くなったこともあるし、一応気になってその姿を捜すリビングにはいなかった。

瀬奈がかけてくれたのだろう、タオルケットをたたんでソファの隅に置き、リビングを出る。視線を巡らせると瀬奈はすぐに見つかった。玄関で自分のロードバイクの汚れを掃除している。

「……………」

「あ、黒羽くん。ここにあったウエス借りちゃってるけど、いい？」

「……………どーぞ」

「ありがとう」

黒羽は壁に背を預けて廊下に立っていた。山道を走る中で付着した泥汚れや草葉を、瀬奈は丁寧に拭い、取り除いていく。

「黒羽くんは、自転車好き？」

ふと思いついたように瀬奈が訊いてきた。曖昧に答える黒羽に、「じゃあヒルクライムは？」と続けて訊ねる。黒羽はきっぱり言った。

「嫌い」

「えー？　なんで？」

「登りは疲れるだろ。毎回『さつさと終われ』って思う」

「でも、このジャージ赤い水玉だし。登りが嫌いなのに、なんでツールの山岳賞柄なんて持つてるの？」

瀬奈が指さしているのは、玄関の壁に飾ってある一枚のジャージだった。白地に赤い水玉模様　すなわち、ロードレースの世界最高峰『ツール・ド・フランス』の山岳賞ジャージと同じ柄。

「前、ヒルクライムの大会でエイジ別で優勝した時、景品で貰った。ダサいから一回も着たことないけど」

ジャージには大会のマスコットキャラクターが堂々と描かれていた。熊だか猫だかよくわからないキャラクターが、優勝トロフィーを頭に載せて笑っている。　ダサい。

しかし瀬奈にとっては、ジャージのデザインよりも大会の結果の方が気になったようだった。

「優勝！？　すごい！　　あ、じゃあこのトロフィーがそのときのやつ？　わあ、すごいね」

すごいすごいと連呼されて気恥ずかしくなり、「たいした大会じゃないし」とぶっきらぼうに付け加える。瀬奈はそれでもすごいと感嘆の声とともに振り返り、黒羽を見上げる。猫のような瞳がきらきらと輝きを増していた。

「やっぱり、自転車好きなんでしょ？　私も大好きなの。自分の力

ですつと遠くまで走れるって、すごい」

「……瀬奈は、どこから来たんだ？」まだ訊いていないことを思い出して、黒羽は遠慮がちに訊く。「……『かくまって』なんて言うてたけど、それと関係があるのか？」

「えっ……」

瀬奈は一瞬目を丸くした。それから、ちょっと情けない笑顔を見せる。

「もしかして私、倒れる時にそんなこと言ってた？ あはは……マングとかラノベみたいなのに憧れてたせいかなあ。主人公のもとに転がり込むヒロイン的な」

「……？」

たとえばがよくわからないが、つまり、疲れ果てていて無意識に言葉が出ただけなのだろう。そこに意味なんてないのかもしれない。

整備途中のロードバイクが目に残まって、ふと思った。

瀬奈は、今日はこれからどうするのだろう。

「かくまって」と言っていたが、行くあてがないのだろうか……

「……あのさっ」

「何？」

ロードバイクを撫でながらジャージを見上げていた瀬奈に、早口にまくしたてる。

「無理にとは言わないけどさ、今日はとまっ……泊っていても、いいぞ。今から走ったってじきに暗くなるし、この辺りに宿なんてないし……」

「いいのっ？ ……だけど、迷惑にならないかな」

「夏休みの間、家族とは別居してるから問題ない。それにお前、これから走る体力なんてないだろ」

「ありがとう。私のこと心配してくれてる？」

「うっ……そういうわけじゃないけどさ。ここで追い出して何か問題が起きたら、オレの責任だし！」

照れ隠しに語気を強める黒羽を、瀬奈は眩しそうに見上げた。大きな目を細めて、「じゃあ、一晩泊めてもらおうかな」と笑う。

「泊めてやる代わりに、晩飯は作るの手伝ってもらうからなっ」

そう言っただけでリビングに戻りながら、黒羽はどんなメニューにしか考えていた。せっかくだから、今夜はちょっと豪華な感じにしてみよう。冷蔵庫のストックで足りるといいけど。

2 柚木崎瀬奈（後書き）

語句解説

・ ツール・ド・フランス……グランツールのひとつ。総距離3000 kmを超えるステージレース。総合1位には黄色いジャージ「マイヨ・ジョーヌ」が与えられる。

・ 山岳賞ジャージ……「マイヨブランアポワルージュ」。ツールの山岳賞。白地に赤い水玉模様。

3 ダウンヒル（前書き）

かっこいいサブタイトルが思いつきません……（＜―＞）

3 ダウンヒル

木々の緑が高速で後ろへ吹っ飛び、幹の茶色や影の闇色と融解していく。下ハンドルを握り姿勢を低くして坂を下る黒羽は、決してペダルを回す脚を止めようとしない。ステムに取り付けたサイクルコンピュータの表示に目を走らせる。

60 km/h

黒羽は早朝から自転車で走りに出かけていた。もちろん遠矢たちと一緒にではない。ひとりで坂道を下るのが目的だ。

ひとりで走る時、黒羽は必ずタイムを計る。今日の場合は、峠に登るタイムと、下りのタイムだ。たった一秒を削るために、何度も繰り返したイメージを正確にトレースしていく。

(……まだ、遅い)

車を通ることのない道なので、躊躇なく反対車線に切り込んでいく。ブレーキを引くのがイメージよりコンマ数秒早かった。想定していたラインから逸れてしまい、わずかなタイムロスになる。

黒羽はギアを一段重くして加速した。見慣れた景色が猛スピードで後方へ消え去っていく。路面のひび割れ、落ち葉、枝、小石迫りくるすべてを確実に目視できている黒羽に落車への恐怖はなかった。もっと速く、速く 限界まで加速していく黒羽の走りは『死』と隣り合わせであり、初めて会った時の遠矢は「頭のネジがまとめてぶっ飛んでる」と例えたほど。

スピードの出ないヒルクライムよりも、ダウンヒルの方が圧倒的に楽しい。スピードは怪我や死への恐怖さえ快樂に変えてくれる。

こんな走り、他の誰かと一緒にできることではない。自分の危険な？趣味？に巻き込んで傷つけてしまいかねないのだから。

67.5 km/h . . . 67.8 km/h . . . 68 .
1 km/h

(ッ……もう、ちょい……)

タイヤのグリップが抜ける寸前まで車体を傾けてコーナーを抜けた。直後にトンネルへ突入する。風の通り道で加速する中、さらにシフトアップしてギアをアウター×トップに。短いトンネルから吐き出され、曇り空の下に躍り出た時、すでにペダルは回り切っていた。その状態からハンドルを引きつけ、ゴールまでスプリントを挑む

「　　ぷはっ」

トンネル後の直線を下り終えると平坦な農道に出た。同時に口を開け、止めていた呼吸を再開する。姿勢だけは下ハンドルを握ったまま惰性で進み、ちょうど五十メートル進んだところでストップウォッチを止めた。一昨日よりコンマ数秒だけ縮んだタイムを頭に刻み込み、次にトップスピードを確認する。

75.6 km/h

一瞥して、黒羽は嘆息した。今日はそこまで調子が上がってないらしい。道があまり良くないこともあるが、まだまだ自分の力不足

も否めない。

「……もう一回くらい、行つとくか」

急旋回を決めてＵターン。たった今下つてきた坂道を見上げて、黒羽はもう一度長い溜息をついた。毎度のことだが、これをまた登るのか

やっぱり登りは嫌いだ。

客人もいることだし、早めに帰らなければならない。黒羽はストップウォッチで再び計測を始め、登り坂に向けてペダルを踏み込んだ。

……

黒羽のログハウスは、もともと絵描きだった祖父のアトリエだった。祖父が他界してからは、生前から入り浸っていた黒羽がそのまま自分用に使っている。学校のある間は半ば無理やり自宅に連れ戻されたりするが、夏休みに入ってからというものの、黒羽は一度しか自宅に帰っていない。

日が昇ってセミが鳴き始めても誰もいない、静寂に満ちた家。しかし今朝は様子が違った。ドアについたベルをカラコロ鳴らしながら玄関を開けると、自分のものではない自転車用のシューズが揃えて置かれている。

(……?)

焦げたにおいが鼻を刺した。何かと思いながらも、ロードバイクを壁に立てかけ、専用のシューズを脱ぐ。凝り固まった足をもみほぐしていると、パタパタとスリッパで駆け寄ってくる音が聞こえた。昨日黒羽が助けた行き倒れの「旅人」だ。

「黒羽くうん……」瀬奈はあわあわと戸惑った様子だった。「ごめんね……お魚焦がしちゃった」

なるほど、この焦げたにおいはそれか。納得した黒羽は今日何度目かの溜息をついた。

「あんたが料理できないのは、昨日の夕飯作る時点で知ったし朝も俺が作るから『遠慮しろ』っていったよな？」

「うう……でも、私も何か手伝わなきゃダメでしょ？ 泊めてもらってご飯までもらったのに、何のお礼もなしじゃあ……」

「腹減ってるのに飯が減る方が、よっぽど迷惑だけど」

「……………ごめんなさい」

深く頭を下げた瀬奈の仕草にどきりとする。動作の隅々に品の良さが見てとれる。やたらと様になっていた。

思わず見とれそうになって目をそらし、黒羽はぽつりと励ます。

「ま……まあ、ひとつおかずが少なくらい大目に見てやるよ。腹

減ってるから、先に用意しといてくれたのは助かるし。 そんな
に感謝してるわけじゃないけどなっ」

「あはは。黒羽くんって、素直ないい子だねー」

「はあ？」

思いがけず褒められて黒羽は逃げ出した。瀬奈には申し訳ないが、
食事の前に汗を流したい。早足に廊下を歩いてゆき、途中でキッチン
を覗き込んだ。 瀬奈の作った料理がどんなものか、一応確認
しておく必要がある。

「……以外とまともだな」

昨日はその腕前にひどく落胆したものが、今朝はまともに見える。
失敗したのは魚だけで、他は無事に作れたらしい。

ひとまず安心した黒羽はシャワーに向かい、私服に着替えてから
瀬奈と一緒に朝食の席に着き

油断した自分を恨んだ。

……

「 本当に、最後までご迷惑をおかけしまして……」

「 …… ああ………悲惨だった」

やたらと塩辛くて手をつけられない朝食の後。昨晚のうちに洗濯しておいたジャージに着替え、リュックを背負った瀬奈は、玄関先でぺこぺこ頭を下げ続けていた。対する黒羽もさすがにげんりとしていて、喋る言葉に力が入らない。買い置きのおパンしか食べていないため、すぐに腹が減った。

「お世話になりました」丁寧にお辞儀して、瀬奈はヘルメットをかぶった。出発の準備はできている。「じゃあ、もう行くね。ほんとにありがとう」

瀬奈はまだ遠くへ行くつもりだという。理由は詳しく話してくれず、「どこまで行けるかチャレンジ中なの」としか言わなかった。

上空を覆うどんよりとした雲を見上げて、黒羽は引き止める。

「やっぱりやめた方がいいだろ。じきに雨が降ってくるだろうし、泊れるところなんてこの辺りにはない。あんたの脚じゃどこまでいけるか……」

ここは観光地ではないから、民宿なんか存在しない。しかも瀬奈は山の向こうへ行くと言う。途中で雨が降りだすのは明らかだった。下心などなくても、引き止めるのは当たり前だ。

「せめてもう一日泊ってけよ。明日には晴れるって天気予報で言ってたし。まだ脚も回復しきってないだろ？ 雨の中、慣れない奴がここの道を走るのは危ない」

「……でも……私、行かなきゃいけないから」

「どうしてっ」

やや声を荒げる黒羽に、瀬奈は情けない笑顔を浮かべた。

「黒羽くんに、迷惑かけちゃうから」

「迷惑なんて……。あ、おいっ！ 待てよ！」

「ありがとう。バイバイ！」

瀬奈はロードバイクに跨ると、呼びとめる黒羽に手を振って走りだした。ログハウスの前の坂道を、軽いギアでゆっくりと登りだす。

どうなっても知らないからな。

「……………バカ」

そう呟きながらも、黒羽はその場に立ち尽くして、瀬奈の姿がコーナーの向こうに消えるまで見送っていた。

4 二人の理由（前書き）

「明日からまた合宿だー！」

4 二人の理由

坂を登って行く途中、自分の脚が予想以上に疲れていることに瀬奈は気付いた。黒羽の忠告を聞き入れるべきだったのだ。そんな風に思っても、出発した今となっては遅いが。

普段たいして走りこんでいない中三の少女が、休み休みとはいえ、一度に二百キロ以上走ったのだ。しかも、限界を迎えて倒れるほどに。たった一晩休んだくらいで回復しきるはずがなかった。

「っ……はあ……は……」

背中荷物がやたらと重く感じる。雨の迫った山の中は湿度が非常に高く、真っ先に蒸れた背中は汗でぐっしょりになった。背中だけでなく、すでに身体じゅう汗だくだ。雨が降り出す前にできるだけ距離を稼ぎたいが、ペースは一向に上がらず体力ばかりが削られていく。

つらい。

脚が、思うように動かない……

どのくらい進んだのか感覚がなかった。進んでいるはずとしたいが、一方でそんな幻想を打ち消している自分がいる。きっと、黒羽のアトリエからはそんなに離れていない。山頂はまだ遠い

うねった細い山道は、左右を深い木立に覆われているせいで景色が代わり映えない。それも距離の感覚を鈍くさせていた。いつまでも前へ進まない錯覚に焦りを募らせているうちに、ついに雨粒が腕に落ちた。疲労の色が濃い顔を上げると、雨は早くも勢いを増し

てきた。

薄手のジャージはすぐに水を吸いきって重たくなった。坂を登るということは、重力に逆らって走るということだ。おもりが増えるほど登りでは不利になる。

疲労の溜まっている瀬奈は、これ以上走るとはできなかった。どこか雨宿りできる場所に　そう思い視線を巡らせた途端にバランスを崩し、瀬奈は悲鳴を上げる間もなく落車した。目を離れた隙に路面の凹凸にはまり、タイヤが滑ったのだ。

「……っう」

小さく呻き、ゆっくりと身体を起こす。何よりも先に自転車の状態を確認し、フレームに傷がついたことに申し訳なさを感じる。自分のせいで大切な自転車が傷ついたことを悔みつつも、次に自分の身体を見やった。幸い、路面が濡れているため擦過傷は酷くなかった。

「……………雨宿り、しなきゃ」

すでに折れかけていた前へ進む気力が、この落車で完全に折れてしまった。それでもなんとか雨だけはしのぐと、雨宿りできる場所を探して再び走り出す。「黒羽のもとに戻る」という選択肢はない。

彼にこれ以上の迷惑はかけられない。戻ってはいけない。戻ったら、迷惑をかけることになる……。

雨はやむ気配がない。整備が行き届いているとはいえない路面は、

降り続く雨によって非常に滑りやすくなっている。瀬奈は散漫な注意をかき集めて進んでいく。しかし、傾斜が急になりペダルを踏む足にトルクがかかったため、後輪のグリップが抜けた。

「きゃっ」

一瞬の不安定な浮遊感の後、華奢な身体がアスファルトにたたきつけられ、しびれるような鈍い痛みが走った。反射的に起き上がろうと手を伸ばし、細い指が路面をひっかく。だが、それから瀬奈はなかなか起き上がろうとしない。

(……もう、無理だよ……)

これ以上走れない。

心も身体も、これ以上先に進もうとしなかった。泥水に片頬を浸して横たわったまま、瀬奈は泣きだしそうで瞼を閉じた。いつそこで旅を止めようか、とも思ってしまう。そんなことをしたら負けだと分かっている、諦めた方が楽だろうとの誘惑に、疲弊した心は大きく揺さぶられる。

瀬奈は道路に横たわったまま、傍らに倒れているロードバイクにすぐるように手を伸ばし、フレームを握りしめた。誰か助けられないかと、身勝手に祈りながら。

どのくらい時間が経っただろうか

長い時間横たわっていたようにも、短い時間だったようにも思える。ぼんやりとした、このまま水底に沈んでいきそうな意識に呼びかけてくる声があった。

「瀬奈！」

突然身体を抱き起こされた。手から離れたロードバイクが地面に小さく跳ねるが、そんなことは気にならなかった。うつすらともしかしてと 希望を感じて目を開ける。

「何こんなところで寝てんだよ」

「……黒羽くん……」

カップを着た黒羽は、苛立ちと呆れと安心が入り混じった表情で瀬奈の上体を抱きかかえていた。その後ろには投げ出された白黒基調のロードバイク。

うれしくて真っ先にお礼を言いたかったが、先に疑問が口をついた。ほとんど意識せずに、勝手に滑り出した感じ。

「なんで……来てくれたの……？」

「はあ？」

瞳を潤ませている瀬奈とは対照的に、黒羽はすっかり呆れた風だった。何当たり前のことを、とても言いたげだ。

「お前、自分で言ったこと忘れたのかよ」

「……え」

「『かくまって』って頼んできたのはこのどいつだよ。自分で言ったことくらい忘れんな、バカ」

瀬奈自身は覚えていないが、倒れるときに口にしたという言葉。もちろん、その言葉が意味することを瀬奈は知っている。だが、まさかそんな言葉が黒羽に自分を引き留めさせるなんて……。

「ほら、瀬奈の分のカッパ。もつず濡れだけど、着ないよりマシだろ」

「……………もう一日、泊めてくれるの……………」

「当たり前のこと訊くなよ」さっさと自分のロードバイクを引き起こして、黒羽は促す。「オレの後をトレースして走れよ。それならたぶん安全に下れる」

……

黒羽は瀬奈に合わせてゆっくり坂を下った。落車などのトラブルなくアトリエまでたどり着き、先に瀬奈にシャワーを浴びさせる。その間に服を着替えた黒羽は二人分の自転車整備を簡単に終えて、リビングでテーブルに着いて瀬奈を待った。

点けているだけのテレビを流し観ていると、黒羽が貸したシャツを着た瀬奈が戻ってきた。荷物が全部濡れてしまったため、仕方なく貸したものだ。嫌がるかと思ったが、案外すんなり着てくれた。

身体はほんのり上気していて、充分に温まれただろうと思われる。

「……で」時期はずれな温かいお茶を淹れて差し出し、ソファに座った瀬奈に言う。「オレが言った通り、雨が降ってきたわけですが？ 疲れてロクに走れない柚木崎さんは、どうして無理に先を急いだのかな？」

「丁寧に喋られると、逆に違和感があるね……」

「いいから吐けよ。お前が何か隠してるのは感づいてるんだ」

「んっ……言わなきゃダメ……？」

ちらと上目に見られて一瞬動揺するが、気を引き締めて問いただす。

「……答える。じゃなきゃ、やっぱ追い出すぞ」

本当に追い出すつもりなんてないが、これは純粹な瀬奈には効果てきめんだった。「えっ」と動揺して、おろおろと居心地悪そうに視線を泳がせる。その様子が「何かある」と物語っていた。

「……どうして」

しばらく思い悩んでいた瀬奈は、ようやく口を開いても質問には答えず、逆に訊いてきた。

「……どうして黒羽くんは、そんなに私のことを気にかけてくれるの……？」

「……………知るか、そんなこと」

「答えてくれなきゃ私も答えないもん」

「っ……………」

今度は黒羽が言葉に悩む番だった。

心配だから　これは嘘じゃない。でも改めて訊かれると、それだけじゃないと思ってしまう。

好きだから　これは違う。少なくとも、「好き」だなんてはつきりとした想いは抱いていない。

(じゃあ、何て答えればいい……………?)

「……………瀬奈、が」

「うん」

「瀬奈が……………自転車に乗ってるから。……………だと、思う。たぶん」

「……………何それ」

「し、知るかよ！　他にこれといった理由なんてないんだから仕方ないだろ！」

ただの同族意識だ。

早口にまくしたてた黒羽は一度わざとらしく咳払いし、「それで」と続ける。

「オレは答えたぞ。瀬奈、お前の番」

言われて、瀬奈はようやく諦めたようだった。照れ隠しのような誤魔化しが目的の情けない笑顔を浮かべる。

「私は……」

一拍

「家出、してきたんだ」

5 小豆高チャリ部

「AM 5:52」

普段あまり走らない峠道を急ぎながら、神島遠矢はサイクルコンピュータの時計表示に目を落とした。この時間なら、あいつはすでに起きているだろう。

頭上を木々の枝で覆われた坂道は薄く影が落ちて、ひんやりと涼しかった。やはり夏場は早朝からの練習に限る。満足げな表情の遠矢は鼻歌交じりで、徐々にペースを上げていく。だが、それを引き留める抗議の声。

「ちよつと遠矢！ 待ってよ……！ ペース上げ過ぎ……」

「……はあ」

またか 遠矢は左足をペダルから外して地面に着いた。登っていた坂道を振り向くと、後を追ってきた少女に呆れ顔で言う。

「んだよ部長。早くしないと黒羽が逃げちゃうだろー」

「っ……だから、って……速すぎだバカ！ あたしもいるってこと忘れんな……！」

「だあかあらー、部長はコンビニで待ってろって言ったじゃんか」

「いい加減、部長じゃなくて名前で呼びなさいよ……」

ようやく遠矢に追いついた少女　水鳥鈴音は自転車競技部の部長だ。入学して間もない頃、遠矢が貰い物のロードバイクに乗っているのを目撃し、自転車部設立のために強引に引き込んだ張本人である。

県内に女子選手が少ないということもあるが、鈴音は遠矢と同様に東海大会まで出場した。　とは言っても、当然男の遠矢とは能力の差があり、あまり速く走り過ぎるとちぎれてしまう。だから今朝は「黒羽を連れてくるまでコンビ二で待ってる」と言ったのだが、「嫌だ」の一点張りですべてしまった。

「疲れた……」鈴音は遠矢に背中を押されて走りながら呟く。「黒羽くんは、いつもこんなとこ走ってるの……？」

「らしいね。ずっと昔から」

「……こんなセクハラ野郎よりよっぽど速いのになんでなかなか練習に来ないのかしら……ねっ！」

「おっと」

背中に当てられた手が下方に迫りつつあったので、鈴音はそれを振り払い仕返しにボトルの中身をかけた。しかし遠矢は立ち漕ぎで加速して、難なく回避してみせる。「ポカリもったいねえ……」とぼやいてから、先にコーナーを抜けた遠矢は目的のログハウスを見つけた。

黒羽の祖父が遺したアトリエ。割とシンプルながらも温かな外観。小さな庭の隅には花壇がある。黒羽は結構几帳面なのだ。

(単に女っぱいだけかもしれないけど)

本人が聞いたなら二度と練習に出てくれなくなりそうなことを思いながら、遠矢はロードバイクを階段に立てかけた。癖でニヤニヤしながら呼び鈴を押す。

「……さあて、今日は逃がさないぜカラスちゃん……」

「黒羽くんが来てくれないのって、遠矢がセクハラしたせいじゃないの?」

「してねえよ!」

確かに、初めて会った時はびっくりしたけれども。
うっかりナンパしそうになったけれども。

痛い思い出を再封印しながら黒羽を待つ。だが、しばらく待っても現れない。先日「迎えに行く」とメールで予告したのはミスだったか。

何度か呼び鈴を押しても黒羽が出てくる気配はなく、諦めて帰ろうとした時。ガチャリとドアが開いた。待ちに待った黒羽の登場に、遠矢は反射的に手を伸ばした。細い手首をしっかりと掴み、逃げられまいとする。

が、

「……ふえ?」

「……………は?」

現れたのは”美少女”だった。

可愛いが”黒羽”ではない。黒羽はこんなに髪が長くないし、もう少し日焼けしているし、伸長がある。何よりも少女の寝ぼけ眼は、獲物を狙う猛禽もつきんのような黒羽とは違い穏やかなものだった。

「あのう……」見知らぬ寝起きの美少女は戸惑いがちに訊ねてきた。
「どちらさま、ですか……？」

「ああ、いや、その……小豆高あずきチャリ部って言うてくれれば、黒羽は分かると思うんだけど……」

「自転車部の方ですかっ!？」

勢い込んで訊く美少女に驚き、遠矢は思わず握っていた手を離してしまった。少しがっかりしながらも、質問には答える。「そうだけど」

「わあ、自転車部か……いいなあ。あ、もしかして黒羽くんと、練習の約束してましたか? 起こしてくるので、ちょっと待っていてください」

「いや、待つ」

呼びとめたが、のんびりした雰囲気ふんいきの少女は以外にも素早く室内に戻ってしまった。黒羽のことだから、呼びに行ってもどうせ来たがらないだろう。

少女を待つ間、首を傾げている鈴音が呟くように言った。

「そういえばさ。黒羽くんって妹いたよね？　今の、妹さんかな」

「いや、確かにかわいいけど白雪ちゃんじゃないよ。部長は白雪ちゃんに会ったことなかったっけ？」

「ない。……まさか遠矢、その白雪ちゃんにまでセクハラ」

「してねえって！」

（どんだけ信用ないんだよ、俺）

果たして、やはり黒羽は出てこなかった。

「すみません……黒羽くん、今日は気分が乗らないって……」

少女が本当に申し訳なさそうに頭を下げるので、遠矢も鈴音もいたたまれなくなり退散した。先ほど登ってきた道をゆっくり下りながら、二人はあの少女が誰なのか訊ねなかったことを今更ながらに思い出していた。

「Date」 7 / 31 8 : 10

「From」 遠矢先輩

「Sub」 あの子は彼女？

「Temp」

「Main」

あのかわいい子誰？

彼女？

うちの中学じゃないよな。

夏休みだからアトリエに連れ込んでるのか？

誰にも言わないからセンパイに教えてみるよ。

追記

ついでにメアドも教えてくれたらありがたい

6 サイクリング

「彼女じゃねえよ……」

いつもよりのんびりと朝を迎えた黒羽は溜息をつき、ぼそりと遠矢のメールに突っ込んだ。対面の席で朝食のご飯をほおばっていた瀬奈が小首を傾げるが、黒羽は「何でもない」と首を振る。

先日 of メールを読んで予期していたことだったが、瀬奈が遠矢たちと顔を合わせる事になるとは思ってもいなかった。ちよつとした非・日常的イベントに見舞われて対策を怠っていたせいだ。

ちなみにそのイベントとは、言うまでもなく瀬奈のことである。

いつも通りの夏休み、見ず知らずの美少女が突然転がり込んできたのだ。しかも第一声が「かくまって」。ちよつとした事件の香りが思春期の心をくすぐる。瀬奈は否定していたが、もしもマンガや小説のような出来事だとしたら

ちよつとだけ、運命を感じてしまったり……。

「黒羽くん？」

「！」

「……どうしたの？ お箸止まってるけど、食欲ない？ ……それとも、やっぱり私、料理下手だったかな……」

「いや！ 確かに料理はへ 上手くはないけど！ これはこれで
アリだと思う。うん」

慌ててフオローを入れると、どうやら間に合ったようだった。瀬
奈は「もつとがんばる」と気合を入れて、昼食について考え始めて
いた。黒羽としては、作らなくていい（作らないでほしい）のだが。

「そういえば」ふと思い出したように瀬奈が言う。「今朝、黒羽く
んを呼びに来た自転車部の人たちに、ちゃんとお詫びの電話した？
せめてメールくらい送らなきゃ」

「はあ？ なんで？」

「だって、わざわざあんな坂道を上って迎えに来てくれたのに……」

「断られるって分かってるのに来る方が悪いだろ。日頃の行いが悪
いんだよ、遠矢さんは」

最初、ナンパされそうになったし……。

悪寒に震えて味噌汁をすする黒羽に、瀬奈は妙にしつこく食いつ
いてきた。

「女のひとには、何も文句言わないんだね」

「ん？ 鈴音さんか。鈴音さんはたぶん、遠矢さんについてきただ
けだと思っから許す」

「……甘くない？」

「そんなもんだろ」

「……むづ」

なぜかうじじ……と睨まれて、黒羽は対応に困った。怒らせるようなことを言った覚えはないのだが、いったい何が不満だったのか。訊ねてみたが、瀬奈は黙ってそっぽを向くばかりだった。

「黒羽くん、なんで一緒に走りに行かなかったの？ 私だったら絶対ついてくのに」

「走りにいきたいのか？」

「……どうせ、これから出発するから」

「そっか」

もう、行ってしまうのか。

チクリ 胸にごく小さな痛みを感じた。味噌汁をすするふりをしてちらりと顔色をうかがうと、瀬奈も浮かない顔をしている。

これは、黒羽の勝手な妄想かもしれない。

だが黒羽には、瀬奈がまだここを離れたがっていないように見えた。

だから、

「一緒に、走りに行くか？」

つい、そんなことを口走ってしまった。

「えっ？　ほんと!？」

瀬奈は驚いたように顔を上げた。見開かれた大きな瞳には、期待と疑問が入り混じっている。

「……でも、急にどうしたの？　さっき黒羽くん『今日は気分が乗らない』って、自転車部の人に……」

「気が変ったんだよ。悪いか」唇を尖らせて、照れ隠しにぶっきらぼうな口調を意識する。「別にっ、先を急いでるなら無理に誘わなけれど。瀬奈がどうしてもって言うなら、この辺りの道を案内してやっても……」

「……ふふっ」

「な、何だよ!？　にやにや見つめんな、遠矢さんみたいで気色悪いだろ……!」

「んー？　だって黒羽くんがカワイ　優しいから、つい」

一瞬本音が聞こえた気がしたが、どうやら誘いに乗ってくれたらしい。

ほっと溜息をついた黒羽は無意識に、瀬奈がまだここにいてくれることに安心していた。

……

夏空の下でも、木々に頭上を覆われた山道はだいぶ過ごしやすい。あまり体力のない瀬奈と一緒に走るなら、陽にさらされ続ける平坦よりも涼しい峠がいいだろう。そう思って瀬奈を連れ走りだした黒羽だったが、どうやら二人の力に差があり過ぎた。

黒羽にとっては当たり前の傾斜が、瀬奈にとっては大きな障害になる。そのくせ瀬奈は無理して黒羽にペースを合わせようとし、黒羽が気付いた時にはすでに脚を使い果たしていた。

「……たく、無理するなってあれだけ言ったのに……」

「はあ、はあ……ご、ごめん、ね……」

「喋る余裕あったら、脚、回せ……」

黒羽は漏れたひとり言に答えようとする瀬奈を黙らせ、自分も黙々とペダルを回し続ける。瀬奈の華奢な背中を片手で押しながら、道が悪い峠をゆっくり登っていく。

瀬奈はだいぶ体重が軽いし、自分でもペダルを漕いでいるのだが、それでも支える側にはかなりの負担になる。歯を食いしばって登る黒羽に、瀬奈は情けない微笑を浮かべて弱音を吐く。

「ね……もういいよ。黒羽くん大変でしょ？ ちょうどお昼だし、ご飯はアトリエに持って帰って食べようよ。帰りは下りだから、私

でもゆっくりならついてけるよ」

「ッ……ヤダ」

「黒羽くん……。私、もう無理だよ……。走れないの。登れない……」

「オレがいるだろ」ギリッ　と奥歯を噛みしめて、黒羽はアイウエア越しに坂の上を睨んでいる。「こんな”道”に、負けてたまるか」

ひとりで走るよりも遥かに遅い　が、それでも確実に”前に進んでいる”のだ。

黒羽につられて視線を上げた瀬奈には、ようやく登り坂の終わりが見えた。彼女の表情の変化を見てとって、黒羽はペダルを踏み込む脚に一層の力を込めた。瀬奈も黒羽に合わせて懸命にペダルを踏み、最後はあっけなく登りきった。短い平坦に入り、急に脚が軽くなる。

「……登れた……」

「当たり前だろ。……オレだっているんだから」

「うん。ひとりじゃ、ないもんね」

瀬奈が浮かべた笑顔はやっぱり情けなくて、黒羽は少し返事に困った。

7 ちょっとだけ……

坂を向こう側へ下っていくと川辺に出た。そこでようやく、黒羽は「飯にしよう」と言った。

裸足になり、自転車を肩に担いで歩く。いくつか大きな岩が転がっており、そのひとつに二台のロードバイクを立て掛けた。他に人が来ることはないのでワイヤーは用意していなかったが、瀬奈はやたらと心配する。よほどロードバイクを大切にしているらしい。

「だってね、ほら……マンガみたいにかっこよく言うなら、唯一無二のかけがえのない『相棒』だし」

「マンガじゃなくてドラマか映画だろ。杉下右京」

「そういう意味じゃないんだけど……」

瀬奈は困ったような笑みを浮かべて、沈黙をごまかすためにおにぎりにかじりついた。大きめの石に腰かけて、ぱしゃぱしゃと小さく水を蹴る。そんな瀬奈を岩の上から見守りながら、黒羽もおかかのおにぎりを食べる。瀬奈が率先して作ったおにぎりは、少し塩味がきつかった。

「ねー黒羽くん」

バタ足を止めた瀬奈は黒羽を振り仰いだ。眩しそうに目を細めて、ちよっと恥ずかしそうに頬を緩めて

「今日はありがと。坂道登るのは大変だったけど、黒羽くんが助け

てくれたし。今度は倒れずに登り切れたし。一緒に走るのは……楽しかったし」

「……なんだよ。そんな風に言われたら恥ずかしいだろ」

「んー……でも私、黒羽くんには本当に感謝してるんだよ？ 今朝、自転車部の人に会った時、うらやましいなあって思った。私、今までずっと、誰かと走ったことなかったから……」

瀬奈の透明な声に寂しげな響きが混じった。黒羽は何も言わずに、黙って言葉の続きを待つ。情けない笑顔を浮かべている瀬奈は石から腰を上げ、黒羽の座る岩のところまで歩み寄ってきた。岩の出っ張りに手をかけて身体を持ち上げる。

「んしょ、っと」瀬奈は勢いよく岩に登り、黒羽の前にちょこんと座る。「……だから、ね。黒羽くんは、私の”初めてのひと”なんだよ」

「その言い方は激しく誤解を招きそうだからやめろ」

特に遠矢とかに聞かれたら、どれだけからかわれることが……。

黒羽はむすつとして立ち上がり、瀬奈から距離を取った。今度は逆に、瀬奈が「むっ」とうなる。

「なんで逃げるの。私は真剣に感謝を伝えてるだけなのに」

「……………別に、オレの勝手だろ。ちょっと、向こう行ってくる」

「？ そっちに何かあるの？」

「底が深くて飛び込める場所があるんだよ。暑いから涼んでくる。瀬奈はここで待ってる」

「えーっ、ずるいよ黒羽くん！ 私も泳ぎたい！」

「オレは上半身脱いでレーパンだけになればいいけど、お前はまずいだろ」

「むう……」

黒羽は瀬奈を置いて、隣り合っている岩の上を飛び移って行った。一番大きな岩にたどり着くと、ジャージを脱ぎ、アンダーシャツも脱ぐ。脱いだものを隅に置いて、黒羽は両頬に手をあてた。

（顔、赤くなってなかったよな……）

瀬奈の危ない発言のせいで、妙に意識してしまった。さっさと川に入って身体を冷まそう。

軽く膝の屈伸をしていると、瀬奈がふらふらと危なっかしい足取りで後を追いかけてきた。「黒羽くん、待って」

「なんで来るんだよ」

「見るのは私の自由じゃない？ ……わっ、黒羽くん細いねー。ちゃんと筋肉はついてるけど、スプリントとか苦手そう。やっぱりクライマーなんだね」

「ちよっ！？ 寄るな近づくな触ん ひゃッ！？ どこ触ってん

だよおま　ッ！」

ジロジロと舐めまわすように全身を見つめられ、慌てて後ずさった黒羽は足を踏み外した。自分の身長ほど下方の水面に向かい、背中から倒れていく。

「黒羽くんっ！」

助けを求めてさまよう右手を、いつになく鋭い反応で瀬奈が掴んだ。しかしほっとしたのも束の間、二人で折り重なるようにして川面へ落ちた。

……

この日の夜、瀬奈はなかなか眠りにつけなかった。

何度目かわからない寝返りを打って、タオルケットを頬に引き寄せる。ふとした瞬間に今日一日の思い出がよみがえり、暗闇の中でひとり赤面してしまう。”泳げない”のにとっさに手を伸ばし、結局黒羽に助けられてしまった。

必死に絡ませ合った指の感触も

冷たい水の中で触れ合った体温も

泳げない自分を抱きとめてくれた腕の、意外な頼もしさも

身体が乾くまで背を向け合って座っていた時の、燃えるような恥ずかしさも

全部、鮮明に覚えている。

『夏休みは、まだまだたくさん残ってる』帰り際に黒羽が言っていた。『次は、ちゃんと水着を持ってこよう。妹の借りてきてやるよ』

(……私、まだここにいていいのかな……)

黒羽の言葉が本心なら、もうしばらく一緒にいてもいいのだろうか？　そう自問して、瀬奈は小さく首を振った。ダメだ。ダメに決まっている。

いつまでも助けてもらってるわけにはいかない。早く”逃げる”必要がある。でも

(……どうしよう……)

瀬奈はまた寝返りを打った。視線の先、隣の部屋には黒羽がいる。彼はもう寝てしまっただろうか。起きていたら訊いてみようか。「いつまでいていい？」と訊ねたら、ぶっきらぼうだけど優しい少年は何と答えるのだろうか。

(訊けないよ……)

ぎゅっと自分の身体を抱きしめて、黒羽のぬくもりを思い出した。

「あと、ちょっとだけだから……」

7 ちょっとだけ……（後書き）

本日は鈴鹿からお送りいたしました

8 買い物とメール

朝から深刻な事態が発生していた。

テーブルをはさんで向かい合った二人の間には、重苦しい沈黙が漂っている。決して昨日のハプニングを恥ずかしがり言葉を交わせないわけではない。それ相応の理由があった。

「……瀬奈」

「……黒羽くん」

二人同時に名前を呼び合い、また沈黙。互いに言いたいことは分かっている。だから話す必要はないのだと悟り、黒羽も瀬奈もテーブル上にあるカップを見つめる。

ぐううう……

長い沈黙を破ったのは、二人のお腹の鳴き声だった。たったひとつのカップ麺を見つめたまま、両者ともに首から上が真っ赤になる。いたたまれなくなつて、どちらからともなく泣きことを漏らした。

「……まさか、食べ物がなくなるなんて……」

割とのんびり眠っていた二人が起きたのが七時半。瀬奈にばかり任せると食事が多少残念なことになるので、今朝は黒羽が先にキッチンに立った。が、

「何もない……？」

冷蔵庫を開けた黒羽は凍りついた。あらかじめ買い込んでいたはずの食材がほとんど残っていなかったのだ。遅れてキッチンにやってきた瀬奈に訊くと、彼女は「あっ」と声を上げた。

「ごめん……昨日の晩ご飯で、使いきっちゃった……」

……

「AM 9:45」

自転車で山を降りた二人は、地元の高校近くにあるスーパーマーケットを訪れていた。目的はもちろん、食料の調達である。

「……つかれた……」

買ったものを積むのにはママチャリの方が便利なため、黒羽はママチャリで来ていた。瀬奈は「ゆっくり行こう」と言ったのだが、意地になってガチ漕ぎし、結局瀬奈と同じようなペースで走ってきた。おまけに朝食は、ひとつのカップめんを瀬奈と半分こしたただけだったのだ。

瀬奈はリュックから水筒を取りだし、蓋に麦茶を注いだ。汗だくで「あちい」とばやく黒羽に差し出す。「お疲れ様あ。どうぞ」

「瀬奈、先に飲んでいいよ」

「えー？ 黒羽くんはママチャリだったんだから、お先にどうぞ」

「……そっか、じゃあ遠慮なく」

冷たい麦茶をぐいっと一息にあり、勢いでもう一杯飲み干した。
ふう　と息をつき、タオルで汗を拭う。早く店内に入りたい。

瀬奈も喉を潤したところで、並んで店内に入った。自動ドアをくぐるとちょうどいい温度設定の空気に包まれて、スツと汗が引いていくのが分かる。隣を見ると、瀬奈も表情を和ませていた。

「えっと、メモは……と」財布からメモを取り出して、黒羽は顔をしかめた。「うわっ、改めて見ると多いな」

「ごめんね……私の分まで入っちゃってるから。アトリエに帰ったらちゃんと払うよ」

「あ？ いや、別に責めたわけじゃないから気にすんなよ。どうせオレ、親から渡されてる食費余ってるし」

黒羽はもともと日常的にアトリエに入り浸っていたため、親からアトリエで生活するための食費はもらっている。月々の金額は大したものではないが、毎月余りを貯めているので余裕がある。

そう説明してもなお申し訳なさそうにしている瀬奈を促して、黒羽は必要なものをカートに載せていった。食材だけでなく、洗剤やトイレトペーパーなどの日用品も買い足しておく。狭い町では知り合いに出くわす可能性が高いため、なるべく下山しないで済ませるためだ。

「あらあ、黒羽ちゃん。相変わらず可愛いわね」

そんな風に思っていたら、鮮魚店のおばちゃんに声を掛けられてしまった。瀬奈はギクリと硬直した黒羽を不思議そうに見やる一方で、律義におばちゃんに頭を下げた。

「まあ！可愛い子ね。もしかして、黒羽ちゃんの彼女？」

「えっ……！？ええっ……いえ、決してそのような関係では……」

「ふうん？じゃあどのような関係なのかしら？正直に答えてくれたらお魚おまけしてあげてもいいわよ」

（……まずい）

四十代半ばのぽっちゃりとした、眼鏡をかけたおばちゃんは、黒羽の実家のご近所さんだ。もしも瀬奈が下手に受け答えして家族に伝わってしまったら、どうなるか……。妹の白雪への対応にも困りそうだ。

「わ、私はですね　むむっ？」

瀬奈の口をふさいで、代わりに黒羽が交渉する。「この子と一緒に買い物に来たこと、他の人たちには黙ってもらいたいんですけど」

「あらあ？そんなに内緒にしたい関係なのかしら」

「はい。オレたち、親には隠れて付き合ってるんで」

「!？」

瀬奈が突沸を起こした頭から蒸気を上げた。あわわ……と困惑の視線を横から感じながら、黒羽は嘘を続ける。

「彼女がいるってバレたら白雪がうるさそうだし、泣かれちゃっても困るんですね……」

「そうねえ、白雪ちゃんお兄ちゃんっ子だから」

「はい。黙っててもらえるとありがたいです」メモには書いてないタコとエビを指して言う。「これとこれください。今日は二人で好み焼きだから」

「わかったわあ。おばちゃん絶対誰にも言わないから、黒羽ちゃんも彼女ちゃんも、安心して」

ふくよかなお腹をポンと叩いて、おばちゃんは快活に笑った。ひとまず安堵する黒羽にタコとエビを渡しながら、しみじみと語る。

「それにしても……」

「おばちゃんはてつきり、黒羽ちゃんは空ちゃんと付き合うものだとばかり思ってたわよ」

鮮魚店を離れると、瀬奈が心配そうに呟いた。

「大丈夫だったのかな……」

「たぶん。あの人はちょっと口軽いけど、いい人だ」

「口軽いんだ……」

「……………値段まけてもらったから文句は言えねえよ」

黒羽も一抹の不安を感じてはいるものの、何とかなるだろうと高をくくっていた。

ドリンクコーナーを横目に、ジュース買い過ぎると重くなるな……などとぼんやりしていたら、瀬奈が遠慮がちに訊いてきた。

「さっきおばさんが言ってた『空』さんって、黒羽くんの……」

「ただの幼馴染だ。冷やかすのはやめろ」

「そう、なんだ……。そっか、幼馴染か……」

「？」

安心と心配がコロコロと入れ替わる表情を振り向く時、視界の端に見知った人物を捉えた。

「ッ！」

慌ててお菓子売り場の棚に隠れる。鋭い視線で”誰か”に警戒する黒羽に、瀬奈は戸惑いがちにカートを押して近づいてくる。

「どうしたの？」

「っ……知り合いが、いた。できれば会いたくない　レジ行くぞ」

「え？　まだジュース選んでないよ」

「帰りにコンビニに寄る。急げっ」

瀬奈の陰に隠れるようにして、黒羽はレジに向かった。

……

小系空は、ふと何かが気になって振り向いた。視線の先にはお菓子コーナーの棚で、傍にはとてもきれいな少女。思わず見惚れている自分に気づき、さっと目をそらす。

（何だったんだろ……）

しばらくして振り向くと、美少女はすでにいなかった。見覚えのない子だったが、この辺りの住人なのだろうか。あれくらい可愛いと、すれ違ったくらいでも印象に残りそうなものだが。

顔だけでなく、スタイルも良かった。空は何気なく自分の胸に手をやり、むう……と唸る。私ももう少し成長しないものか。

ちょっと鬱^{うつ}になりながらもガラガラとカートを押して歩き、鮮魚店の前で名前を呼ばれた。

「あらっ、空ちゃん！　空ちゃんもお買い物？」

「おはようございます。今日はちょっと、お母さんに頼まれて……」
会釈してから、空は気付いた。「……私『も』って……?」

「え? ああ……ついさっき、黒羽ちゃんに会ったのよ。空ちゃん
は会ってないの?」

「黒羽来てたんですか?」

「うん。可愛い ”ひとり” で、たくさん買い込んでたわよ。
黒羽くん、夏休みはおじいさんのアトリエにいるんでしょう。寂し
くない?」

「そうなんですよ、ぜんぜん家に帰ってこなくて……って、わっ、
私はいんですけど! 白雪ちゃんがかawaiiそうで……!」

「ふふつ、そうねえ。白雪ちゃんも空ちゃんも、最近あまり会っ
てないんですよ」

「別に! 黒羽がアトリエにいるのはいつものことだから当たり前
だし……」ちよつと不機嫌そうに唇を尖らせて空は言う。「でも、
明後日は北高のオープンキャンパスに行く約束してるから……」

「え……あら、そうなの? 楽しみね……」

「楽しみじゃないですよ! っていうか黒羽、オープンキャンパス
なんて忘れてそうだし」

「そうね……あらかじめメールしといたほうがいいんじゃない?」

何だかきこえない気もするおばちゃんに疑問を感じながらも、空

はその場を後にした。

[Date] 8 / 1 10 : 53

[From] 空

[Subject] non title

[Temp]

[Main]

あさつてのオープンキャンパス忘れてないよね？
あと、たまには帰ってきなさいよ。

白雪ちゃんが、待ってるんだから！

8 買い物とメール（後書き）

夏休みが……もう、終わり……だとう！？

9 合流（前書き）

前回の投稿から、だいぶ間が空いてしまいましたね……反省です。昨日で今シーズンの部活の区切りがついたので、ぼちぼち再開します。

9 合流

「8 / 2」

アトリ工周辺よりも傾斜が緩めなアップダウンを超えると、平坦基調の道が一キロ弱が続いていた。やがて日陰が終わり、さんさんと降り注ぐ陽の下に出る。目線を上げると、少し傾斜がきつくなつた登り坂がまっすぐ伸びていた。

まだ続く登り坂を見上げて、瀬奈はうつむいた。ペースを落とすと隣に並ぶと、黒羽はその背中をぼんと叩く。

「もうちょつと目線上げる。上体も起こして。そんなにうつむくと呼吸がつかなくなる」

「……っ、うん……」

「一キロ走れば道の駅だ。そこで休憩するから、あと少しだけ頑張れ」

瀬奈を励まして、まだまだ余裕のある黒羽は自分のボトルを差し出した。瀬奈のボトルはすでに二本とも空っぽだった。

「……ありがとう」

初めは「間接キス」だなんだと文句を言っていた瀬奈だったが、今回はあっさりと受け取った。今日のコースはこの前よりも日向が多いし、気温も高い。慣れてない瀬奈には大変だろう。

「ほらっ、頑張れ。登り切ったらソフトクリームが待ってる」

「……んっ！」

瀬奈はダンシングでスピードを上げた。黒羽はその前に出て風よけになる。登りとはいえ、風よけがあるのとないのでは空気の抵抗がだいぶ違う。黒羽は軽いギアでくるとペダルを回して、瀬奈が付いてこられるペースで牽^ひいていく。

瀬奈のことを気遣いながら走る 何とも面倒だ。

（やっぱダルいな……）

そう思いながらも、黒羽は瀬奈を置き去りにすることなく一定のペースを保っていた。

そして、ハプニングはその直後に起こった。

「あれー？ 黒羽じゃん。アトリエから直接来るならメールしてくれよ。今日も来ないのかと思ったぜ」

店の脇に設けられた屋根の下、ベンチに座ってソフトクリームを食べていると遠矢が現れた。相変わらずにやにやしている少年の登場に、黒羽は顔を引きつらせる。つかえながらも、なぜこんなところで出くわす羽目になったのか訊いた。

「……なんで、遠矢さんが……ここに……？」

「もちろん練習。お前にもメールしただろ」

「っ……」

確かに昨日の夜、メールをもらった。だが、練習の行き先は記されてなかったのだ。またアトリエまで迎えに来られることを警戒した黒羽は、瀬奈がサイクリングに行きたがっていることもあって、いつもとは違うコースに出かけることにした。

しかし、まさか遠矢たちと同じだなんて……。

何だか先読みされた感じで気に入らない。まだあまり休憩していないが、折り返そう。さっさとこの場を離れるべく立ち上がる黒羽だったが、入れ替わりに遠矢がベンチに座って、対面に座った瀬奈に声をかける。

「こないだはどうも。俺、一応黒羽の先輩で、遠矢っていいですよ。よろしく」

「あ……この前の、自転車部の。……黒羽くんがお世話になってます」

「どっちかっていうと、オレがお前を世話してんだろ……」

「んー？ そうだねえ……。黒羽くんには、とてもお世話になります」

瀬奈は言いなおして頭を下げた。いつもの丁寧な所作に遠矢が息をのんだのが見てとれた。黒羽だけでなく、誰でも見惚れてしまうのだろう。

「ええ！？ ケータイ持ってねえの？」

「はい……すみません」

「残念ですねー遠矢さん。さっそく失敗ですかあ」

「黒羽お前、なんでそんなに嬉しそうなんだ……」

いつも無愛想な黒羽の珍しい笑顔に見つめられ、遠矢は気味悪そうに震えた。 と、その脳天に追い打ちが叩きこまれる。

「いでっ」

「人を置いてけぼりにしといて何ナンパしてんのよ！」

遠矢を殴りつけたヘルメットを片手に、鈴音はぐるる……と威嚇している。へらへらと薄ら笑いを浮かべつつ、遠矢は横目で黒羽に助けを求めてきた。こういう時ばかり都合よく頼ってくる遠矢に呆れながらも、黒羽は鈴音の前に割って入る。

「あー……鈴音さん。せつかくのヘルメットもつたいないですよ。遠矢さん石頭だから、ぶっ叩いたら割れるんじゃないですか」

「むっ。黒羽くん、遠矢なんかの味方するの？」

「どっちかっていうと敵ですけど……」

黒羽は味方扱いされて不服そうに顔をしかめた。鈴音は口をとがらせている黒羽の後ろを見やって、半ば隠れるようにしている美少

女に声をかけた。

「この前、黒羽くんのアトリエで会った子だよね？ あの時はお互いに挨拶しなかったから、はじめまして、だね」

「こ、こちらこそ……はじめまして。瀬奈っていいです」

「瀬奈ちゃんって、黒羽くんのいとかか？」

「え？ 違いますけど……」

「なるほど……彼女か。可愛い顔してなかなかやるじゃない、黒羽くん。こんな可愛い女の子と、いつの間に付き合い始めたの？」

「えっ？ か、か、彼女ですか……っ？ わ、私が……？ 黒羽くんと………！？」

「付き合っていないです！」

「そうなの？ でも、同棲するような仲なんでしょう」

鈴音は「正直に話さないよ」と詰め寄ってきた。ついさっき助けた恩はどこへやら、遠矢もにじり寄ってくる。

「大好きなお兄ちゃんが見知らぬ女の子をアトリエに連れ込んでるって知ったら……白雪ちゃん、絶対泣いちゃうよなあ」

「！ 白雪を人質にするとか……卑怯過ぎるだろ」

黒羽のこめかみがひくついた。しかし、遠矢たちはあとひと押し

だと悟る。やはり黒羽の弱点は、妹と幼馴染だ。

……

（どうしてこうなった……）

アトリエに帰り着くなり、黒羽はソファに倒れこんだ。頭を抱え込んで苦悶の声を漏らす黒羽を心配して、瀬奈が傍にしゃがみこむ。

「黒羽くん、大丈夫……？ 熱中症とかだったら大変……とりあえず、お水飲んで」

「……ん」

瀬奈が冷蔵庫から取り出してきた麦茶をコップに注ぎ、差し出した。それを受け取って一息にあり、黒羽はひとつ溜息をつく。面倒なことになった……。

「おい」

むくりと身体を起こして、至近距離で顔を覗き込んでいた瀬奈を見つめ返した。瀬奈が一瞬赤くなった隙に先手を打って訊ねる。

「なんで遠矢さんたちと走る約束したんだよ……」

「だ、だって！ みんなで走る方が、きつともっと楽しいよ？」

「そうじゃなくて……いや、それもあるけど……」 ケータイを取り

出して受信ボックスを開く。「なんで、よりによって明日なんだよ……」

その後。白雪と空をネタに脅されて、黒羽は瀬奈についてある程度教えてしまった。しばらく滞在して一緒に出かけて回るのだと言ったのが間違いで、遠矢たちは「自分たちも一緒に走る」と言い出した。反対する黒羽ではなく、喜ぶ瀬奈と約束を取り付けた。

『せっかくだし、早い方がいいよな』

という遠矢の発言のせいで、一緒に走りに行くのは明日に決定した。瀬奈を自転車部二人（特に遠矢）に任せきりにするわけにもいかず、黒羽も渋々了承した。が、アトリエに帰る途中、昨日空から送られてきたメールを思い出したのだった。

『オープンキャンパス忘れてないよね？』

明日は朝から、空と二人で北高のオープンキャンパスに行く予定だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7777v/>

ヒルクライマー “黒羽” Hill Climber?Crow?

2011年11月27日12時51分発行